

僕はホンヤクで讀んだ事があつた。

Henri David Thoreau の Walden とジャント・フランシスの赤い本を、有島は立つて書物棚から引き抜いて僕に呉れた。

多くの人の前で僕は、自分のダ、イズムに對する信念をヒレキして置かなければ、筆でまだるつこい所を唸つたり、出産の時のやうな身振をしたり、何うにかしてダ、を打ち撒いて叩き込みたい。

『それで會場を借りたり、宣傳したりする費用がないのですが貸してくれませんか』  
『幾何位要るのですか、會場はもう決つたのですか』

有島は十圓札を十枚僕にくれた。

のみならず、六十あまりの品の好いお爺さん呼んで、態々青年會館へ電話を掛けさせ、

『十七日に會場があくから、申し込み金は後でも構ひません』と其のお爺さんは取り次いだ。

『本も家も賣る積りで、今日も古木屋が来る事になつてゐるのですが、家は買手がまだキマラな  
いのです』